

▶ クラウドを自分の思うがままに： 「ベンダー ロックイン」を回避し、 データの主導権を取り戻そう

あなたが初めて手にした車をまだ運転しているか、初めての家にまだ住んでいる可能性はどのくらいあるでしょうか。その可能性はあまりないはずですが。プライベートの生活の中で、私たちはそのときどきのニーズに基づいて異なるソリューションに移行します。初めての車と同じメーカーの車を買いつけたり、初めての家と同じ地域に住み続けることが期待されることはありません。

同様に、ほとんどの組織では過去数年間にプライベート クラウドやパブリック クラウドに投資してきましたが、今ではビジネスのニーズに基づいて、あるクラウド戦略やインフラストラクチャから別のクラウド戦略やインフラストラクチャに移行することを望んでいます。

ただし、データのあるクラウドから別のクラウドに移動することを考えると、ほとんどの IT マネージャーは大きな不安感を覚えます。

少なくとも、重要なビジネス要件である、能力、俊敏性、費用対効果、およびパフォーマンスを犠牲にすることはできません。

ましてや、データの消失、ダウンタイムの増加、高コストなどの最悪のシナリオは避けなければなりません。



しかし、クラウドのインフラストラクチャを変更する必要があるからといって、会社のデータ（またはあなたの仕事）をリスクにさらす必要はありません。データのあるクラウドから別のクラウドに移動できる強力なソリューションがあれば、ベンダー ロックインを回避し、自分のデータやワークロードを自由に移植できるようになります。

▶ 「ベンダー ロックイン」からの解放

このような状況が最初から存在したわけではありません。長年にわたり、企業は特定のハードウェアやソフトウェアのプラットフォームに制約されることを受け入れてきました。それにより、「フォークリフト アップグレード」（全システムのアップグレード）以外の移行は困難になっていました。クライアント サーバーモデルによって、表面上は移行を容易にする業界標準が提供された場合であっても、ユーザーは事実上制約されていました。ハードウェアの更新サイクルはせいぜい 3 ~ 5 年ごとで、新しいプラットフォームによって生じる学習曲線は、組織が新しいソリューションに切り替える頻度が限られていることを依然として意味していました。さらに、データのサイロ化が進行したことで、この理想的な目標を達成することは不可能になっていました。

仮想化は、基になるインフラストラクチャからワークロードを切り離すことで、この状況に変化をもたらし始めました。変化はまずサーバーの処理から始まり、次にストレージ、そして今ではネットワーク自体へと広がっていきました。これによって実質的にインフラストラクチャの重要な部分はソフトウェアに取って代わられるようになり、「SDS (Software-Defined Storage)」の時代が到来したのです。

ただし同時に、特定の仮想化プラットフォーム、それに関連するインフラストラクチャ、そして何よりもそれに付随するライセンス料金から逃れることが困難な、レガシーな IT 環境も生み出していました。仮想化の広がりには、企業がデータやワークロードのポータビリティやモビリティを実現することを依然として妨げていました。

クラウドが台頭するにつれ、組織ではワークロードの移行を可能にするツールを導入することで、ある程度能力を強化できるようになっています。しかし、今なおクラウド プロバイダーは他社のワークロードを自社のクラウドで実行できるように変換するツールを提供することはよくあっても、その逆の変換を行ったり、別のベンダーのプラットフォームに変換したりするツールを用意することはほとんどありません。

「今日のクラウド環境では、インポート可能性、相互運用性、および移行は解決出来ていない重要な問題です」と Forrester のシニア アナリストである Lauren Nelson 氏は述べています。¹ 「ワークロードを真に移植可能にするに関しては、多くの障害が存在します」と語っています。これらの障害には、テンプレートの設計、テンプレートが通信する際に利用するネットワーク機能やストレージリソースについての一貫性、およびその他の基本的なテンプレート形式の不統一に至るまで、さまざまなものがあります。「またときには、その特定のアプリケーションに深く根付いているサービスが存在し、これらを取り除くことが困難になっています」と彼女は続けています。「このため、真のアプリケーションの移行は非常に困難になっています。」

「今日のクラウド環境では、インポート可能性、相互運用性、および移行は解決済みの問題ではありません。ワークロードを真に移植可能にすることに関しては、多くの障害が存在します。」

LAUREN NELSON、
シニア アナリスト、インフラストラクチャ
およびオペレーション、Forrester

▶ 実世界におけるワークロード ポータビリティの実現

しかし組織は、パブリックとプライベートの両方のクラウド環境に対応し、すべてに互換性をもたらすような単一の業界標準が出現するまで待つわけにはいきません。そのような日は決して来ないかもしれません。私たちは、今日の互換性のない異種のプラットフォーム間で、重要なビジネス要件を犠牲にせずワークロードを変換できるものを必要としています。

ここで、特定の仮想化プラットフォームやクラウド サービスに基づいていたり、これらに結びついていたりしないソフトウェア ソリューションが存在すれば、主導権を取り戻すことができます。仮想化やクラウドなどのリソースは、その基になるインフラストラクチャのリソースを消費しているため、管理ツールを経由してこれらを制御できると Nelson 氏は述べています。「API を経由すれば、自分たちで選択した管理ポータルからリソースを監視および管理できます。」「多くの組織はこのような取り組みを統合しようとしてきました。組織は従来の仮想化環境で、単一の管理ツールを使用して 5 つの異なるクラウドプラットフォームを管理し、この情報をさらに統合化された方法で提供できます。」

Commvault は、VMware、Hyper-V、Amazon Web Services (AWS)、および Microsoft Azure 間でワークロードの移行を実現しています。適切なメタデータとコンテキストを取り込むことで、Commvault は必要な変換をすべて実行します。たとえば、VMware VMDK を Hyper-V VHD または AWS AMI に変換できます。これにより、ユーザーがデータの復元処理を実行するのと同じように、マウスをクリックするだけでプラットフォーム間の復元や移行ができるようになります。

このプラットフォーム間のリカバリを他の機能と組み合わせると、実世界でのワークロードポータビリティが実現します。たとえば、開発およびテスト環境において、ユーザーは以下のことが可能になります。

- 開発 / テスト サイクル中にクラウドで VM のプロビジョニングを行う
- 効率的で、重複を排除する複製方法を使用して、帯域幅料金を最小限に抑えながら、データを本番環境用の別のサイトに移動する
- オンサイトを本番用に移行する

同様に、クラウドベースのディザスタ リカバリにおいて、組織では以下のことを実行できます。

- アプリケーション サービス レベル合意書に基づいて、データをクラウドに複製する
- テストまたは実際のディザスタ リカバリ シナリオで必要が生じたときに、プロバイダーのプラットフォームに対する制限なしに、クラウドでリカバリを行う

さらに一般的には、ワークロードの移植性によりクラウドの移行が可能になるため、ユーザーは以下の操作を実行できます。

- データをプライマリ サイトからコピーする
- ワークロードをクラウド内の別のプラットフォームに復元する

電光石火の速度：より短時間でクラウドに到達する¹

俊敏性や設備投資額の削減を含む、クラウドの価値をさらに短時間で実現する方法についてお読みください。

今すぐ読む



ワークロードポータビリティは、企業に必要とされる俊敏性を、クラウドを通して実現することに貢献します。「コスト削減はクラウドの DR に関してすべての注目を集めている要因ではありますが (そしてそれは妥当なことではありません)、俊敏性はクラウドの DR を魅力的にするもう 1 つの主要な要因です」と IDC は述べています。「オンプレミスとクラウドのレポジトリ間でデータを移動し、必要な場合に複数の DR サイトを確立して、必要に応じてプロバイダーを変更する能力は、リカバリ、利便性、およびコストを最適化する選択肢を組織にもたらします。」²

時には小型トラックが必要なことも、スポーツカーが必要なこともあります。一度小型トラックを使用したからといって、二度とスポーツカーは使用できないと人から言われることなどありません。あなたのビジネスも同じではありませんか。

2 IDC, "Leveraging the Public Cloud for Faster Disaster Recovery at Lower Cost," May 2015

▶ リソース

i commvault.com/resource-library/5522b289ec50d0ff2900057c/lightning-speed-getting-to-the-cloud-faster.pdf

▶ Commvault ソフトウェアは、データと情報管理に向けた包括的なアプローチの比類ない優位性とメリットをもたらします。詳細については、commvault.com/solutions をご覧ください。

© 2017 Commvault Systems, Inc. All rights reserved. Commvault、Commvault とロゴ、「C hexagon」のロゴ、Commvault Systems、Commvault OnePass、CommServe、CommCell、IntelliSnap、Commvault Edge、および Edge Drive は、Commvault Systems, Inc. の商標または登録商標です。その他すべてのサードパーティのブランド、製品、サービス名、商標、または登録サービス マークは、それぞれの所有者の所有物であり、これらの所有者の製品またはサービスを識別するために使用されます。すべての記載は通知なしに変更される場合があります。

COMMVault 



▶ Commvault Systems Japan 株式会社 〒141-6008 東京都品川区大崎 2-1-1 ThinkPark Tower 8F

www.commvault.com | PHONE: 03-5747-9610 | jpsales@commvault.com

© 2017 Commvault Systems, Inc. All rights reserved.